私の戦争体験

空襲で家を焼かれ、逃げ惑い、その後も…

桑田富士子

５歳（１９４０生）の戦争体験では客観性に乏しいと言われそうですが、こわかった数々の出来事も、語り合う家族（姉や母）も故人となり薄れてきています。

我が家は静岡県沼津市（１９４４年に合併で９万６千人：沼津市ＨＰより）の駅から歩いて８分ぐらい、貨物列車のたまり場が裏木戸の向こうに見え、表側はバス（木炭バス）通りに面していました。４歳の後半、爆撃が、特にＢ２９の夜襲が地方都市にも来るようになり、日本軍の高射砲の弾が我が家の屋根・天井を突き破って落下。人手不足の時代でしたから、父（４６、７歳）は今の富士市（当時の吉原市）の工場に泊まり込みで働き、月に１度くらい、沼津に帰宅。旧制中学卒業後２年目の兄も、三島広小路駅に泊まり込み勤務。母や姉が弁当を届けに行き、姉は女学校卒業したばかりで、沼津市役所衛生部勤務。

１９４５年（昭和２０年）３月１０日東京大空襲の

直後、母と私と２歳の弟の３人は、父の知り合いの紹介で、富士駅から身延線で３つ目の駅（入山瀬）に疎開、納屋に寝る。侘しい毎日で、早く沼津の家に帰りたかった。お盆だからと沼津に７月１５日に戻り、７月１６日の夜、市街地を見渡す限りを焼き尽くす焼夷弾の爆撃の下を逃げまどい、千本松原の中に入ってホッと。生きられそうだと感じ、松原づたいに西方へ原町往復７里の逃避行でした。市街地では超低空飛行の敵機が近づいてくると「伏せ！」と言われて白い服にカーキ色の父の古着をかぶせられていたので、手足も服も泥まみれでした。夜明けに靄が晴れたとき、松の木に牛を繋いでいた農家の主人が「沼津から逃げて来たのか。大変だったね。うちで休んで朝飯を食べれば、歩いて帰れるようになるさ」と、畑を通って、その家の廊下に腰掛けさせてもらいました。炊き立て白いご飯に金山寺味噌だけの朝食でしたが、ありがたく、ありがたく戴きました。

焼け野原となった我が家に正午ごろ戻ると、父は貨物列車に乗って吉原市(＊)から来ました。かまどに表

昭和 20 年 7 月 17 日未明の空襲で焼け野原になった市街地の惨状。焼け残ったのは沼津郵便局（右）と沼津商工会議所（左）。岳南デパートから写す。

面は黒焦げ、下の方に食べられるご飯が炊けていました。我が家は防空壕が無いので、野宿も出来ず、姉も一緒に貨物列車で私たちの疎開先の納屋に９月まで住みました。すべて焼失したので、部屋代を払えないというと、「それでは働いてもらおう」と言われ、母と姉は土に藁を混ぜて、漆喰のようなものにする作業を毎日。その間、５歳の私が２歳の弟の保育係でした。

私は小学生になっても痩せて小さく(今でいうＰＴＳＤ症状でしょうか)、３年生までは“虚弱児”、飛行音を聞くと逃げ隠れ衝動、中学生になっても心理的チック症状、成人しても無意識に首振りチック症状が出るといわれてきました。

1943(S18)沼津

＊：沼津駅の旅客ホーム構内は客車ごと全て破壊されていた。貨物列車だけが動かせる状況だった。